

森田秋子, 後藤伸介 編

理学療法士が知っておきたい

認知能力のアセスメントとアプローチ

—高次脳機能障害を行動から分析する

宮田昌司 (一般社団法人日本訪問リハビリテーション協会)

賢明な理学療法士(以下、PT)の方々は、運動機能のみの対処だけで済むわけではなく、認知機能や精神状態がすべてのヒトの活動に関係し、自ずとアプローチに影響することは実感しているだろう。しかし、世間からPTは認知機能の把握が弱いと指摘されることがあったり、PT自身も取り扱う領域ではないとして、不勉強を棚あげしてしまう人も少なくないようである。そのようななかで、本書は、この領域に少し不安を抱いている若手や、チームワークが求められているのに知らんぷりしているベテラン諸兄に、あえて他職種からそっと手渡ししてお勧めしてほしい、そんな一冊である。

編集は森田秋子氏と後藤伸介氏。控えめに紹介しているが、所属法人の要職に就かれているのはもちろんのこと、永らく回復期リハビリテーション病棟協会などで活躍され業界をリードしてきた重鎮である。きっと、両氏はチームアプローチの先行きとPTの行く末を、心配してくださったに違いない。

さて、書籍のタイトルを読んで、「認知能力とは何か」という断片的な知識を記載しているだけだろうと思うのは誤りである。読み進めると、臨床家として、チームの一員として理解し対応能力を高めている構成になっている。

第1章は「“認知”食わず嫌いのPT」のために、その必要性和、臨床との関連性を優しく説いている。第2章は認知について基礎的な内容が書かれている。評者はこの領域に興味があって若い頃にルリ

やや山鳥先生の神経心理学入門などを読んだことを思い出す。当時のことを振り返ると、悲しいかな十分な理解でなかったのだということが、今になってよくわかる。事象と療法士としての評価・解釈とプログラムが結びつかず、表面的な理解に終わっていたのだと思うと、とても残念である。第3章は事例である。ここは自身の事例を思い浮かべながら照らし合わせて読まれるとよいだろう。森田氏が開発されたCBA(認知関連行動アセスメント)が現場でどのように活かされているかは特に興味を引くところである。なお、事例に挿入されたイラストを拝見していて「あるあるだな」とニヤリとしながら思うのは私だけではないだろう。第4章は在宅ケアの話である。地域で働く療法士は急増している。そこに対しても執筆者はきっと心配しているに違いない。いつかそこ(地域)におけるアプローチ事例も多数載せていただきたい、そんな気になった。

対象読者の諸氏は、本書を手にとって理解し、そして実践する。そうすれば明日から他者より一歩先に進むことができる。ぜひ、病棟カンファランスで認知能力にコメントしよう、地域で認知の引き起こす生活課題について多職種と共有・協働しよう。執筆者の願いはそこにあるのだと思う。

(B5・頁148 2021年 定価:3,960円(本体3,600円+税10%) [ISBN978-4-89590-719-4] 三輪書店刊)